
感性空間とリズム——クラークス哲学における現象の構造

今橋勇介(東京大学)

本発表は、20世紀前半のドイツの思想家ルートヴィヒ・クラークス(1872–1956)のリズム論を、彼の主著『魂の敵対者としての精神』(1929)において展開される感性空間論に基づいて再考し、リズム概念の現象としての側面と構造としての側面の二面性を明らかにする。

彼の代表的リズム論『リズムの本質について』(1923)における命題——「拍子は反復するがリズムは更新する(*der Takt wiederholt, der Rhythmus erneuert.*)」——は、精神と生命という二元論のうえに立つ古典的なリズム論とされ、これまで批判的に扱われることが多かった。しかしそこでクラークスが示す事例には、音楽やダンス、汽車の音といった運動的なリズムだけでなく、睡眠と覚醒の周期、衣服が皮膚に与えるような微細で非意識的な感覚刺激の反復までもが含まれている。これらは、感性的現象としてのリズムというよりも、むしろ感性的体験そのものを可能にする構造的な条件としてのリズムの存在を示唆していると言える。

こうしたリズム概念の構造的な側面を明らかにする鍵となるのが、主著『魂の敵対者としての精神』において展開される感性空間論である。「感性空間(*Sinnenraum*)」とは幾何学的な事物の空間ではなく、「観得(*Schauung*)」の作用において体験する者の前に広がる感性的体験の場として捉えられている。すでに Michael Großheim (1994) の *Ludwig Klages und die Phänomenologie* において現象学的観点から評価されているように、クラークス哲学は、輪郭を欠いたもの、たとえば空の遠い青みや思い出を伴う香りといった非対象的な現象への感受性を捉えるような新たな視座を開いた。本発表では、その感受性の条件として、リズム的な分節という構造があることを示す。すなわち、クラークスによれば、体験される現象はすべて、この感性空間においてはじめて「いま、ここ」に現象可能なものとして立ち上がるとされるのだが、この感性空間をこのように媒体的な構造として編成するものこそが、まさに波のようにリズム的に分節された観想的な作用なのである。

こうした観点からクラークスのリズム論を捉えなおすことで、リズムの概念は、彼の哲学全体を貫く構造的な原理としての意味を獲得することになるだろう。クラークスがリズム現象に特別な意味を見出したのは、それが感性空間を成り立たせる深層的なリズムと響きあっていると考えたからにほかならない。本発表は、従来の観点からでは捉えきれなかった、リズムの構造的な側面に光を当てることを試みる。